

治水と環境を両立させる 21世紀の河川事業に直言

聞き手・構成 ルポライター 滝川 康治

も反対しつづけたわけですが。良かったのは、政界が動くのではなく、市民運動としてやれたことですね。計画が正しければ認められてしまうかもしれませんが、やっぱり正義は勝つということで、無理な計画はよしせん無理なんです。大変だったけれど、反対しつづけたことに意味があったと思います。「なぜ、そんなに時間がかかったのか」というと、開発局が情報公開や住民参加をしなかったことに根本的な原因があります。もっと早くそれをすれば早く決着がついていたわけです。開発局の責任は非常に大きい。今後は河川に限らず、すべての計画に対して情報公開と住民参加を求めていかないと、また同じ過ちがくり返されるということですね。

中止後、石狩川と千歳川の合流部開発が論議されていますが、小野さんらは二十一年後は、合流部で大規模な工事を行なわなくても、千歳川流域の総合治水対策（注1）を実施するだけで、過去最大だった八一年規模の洪水は十分に防げる」と主張しています。回石狩大橋地点の基本高水流量（注2）を「毎秒二万八千トン」と設定していますが、総合治水対策を実施すると毎秒二万三千八百トンまでの流量を処理できる。これは、八一年洪水時のピーク流量の二万三千八トンを上回る。したがって、流量設定を要するだけで江別市内での石狩川の大規模な河道移設は必要なくなる、という指摘でした。



▶千歳川放水路の是非を議論したワークショップ。札幌市役所（83年、創設市内）

蛇行した川を直線化したり、コンクリートで固めながら洪水を一気に海へ流すことに偏重してきた河川政策が変わりつつある中で、これからの公共事業をどう転換していったらいいのか——。千歳川放水路問題などに取りくみ、川とのつきあい方を考えてきた北大教授の小野有五さんにインタビューし、具体例を踏まえて提言してもらった。

対し、また膠着状態になります。「毎秒二万六千トンとか二万四千トンならどうなのか」という代替案をいくつも出す——行政のやるべきことは、これだと思っただけです。そうすると早く着ていけるし、みんなが満足できれば話が早くまとまるわけで、一部に無理を押しつけることは絶対にできない。いくつもの代替案を出すのが行政の役割であって、それを求めていくことが大だと思えます。

「百五十年に一回の洪水（注1）石狩川の場合」といった確率計算を基に工事をする手法自体を変える必要があるのでは。小野 百五十年に一回でもいいんですが、基本高水流量は計算したら二万トンから一萬八千トンまで数値が出るんだから、少なくとも行政は何通りかのメニューをまっとう用意して、「この場合だったらこうです」という選択の余地を住民に託す。行政が一方的に決めてしまっただけで、これだけやれ」と言うのではどうしようもない。そこなんです。ダムによる洪水調節の話ってそうだし、同じことがすべてに当てはまる。

「確率計算の話は、一般の人には難しいんじゃないですか。小野 いや、メニューが示されれば、一般の人にも分かる程度だと思う。「ここまで守るとすれば、この程度のもがある」とか「二万から一萬八千は、どの値を取っても百五十年に一度の安全度なんです」と説明されれば、誰だって分かる。そんなに難しいことではないんです。隠そうとするから難しい議論になって、数字だけが一人歩きしてしまっただけです。——「隠そうとする」のではなく、いくつかの案をきめ細かく想定してこなかったのが実態ではないでしょうか。小野 というよりも、開発局は事業を大き

「河川の自然復活へ 大胆、多様な試みを」

北大教授 小野有五氏

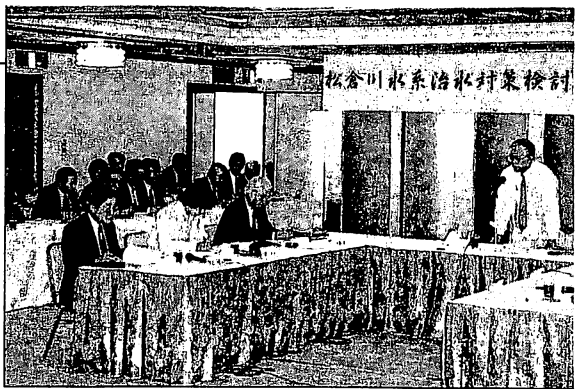


特別インタビュー

（おの・ゆうご）1948年東京生まれ。東京教育大学大学院理学研究科博士課程修了。理学博士。水河を研究し、水河時代から現在までの山の自然史を探る。80年代半ばに北海道に移り、現在は北海道大学大学院地球環境科学科教授。学生たちに環境問題を教えるかたわら、「北海道の森と川を語る会」や「とりかえそう北海道の川」実行委員会の代表として、河川事業のあり方について発言している。主な著書に「北海道の自然史」（共著・北大図書刊行会）「北海道 森と川からの伝言」（北海道新聞社）「川とつきあう」（岩波書店）「自然をみつける物語」（同）などがある

放水路で問われた 情報公開と「参加」

十七年間におよぶ論争の末、一九九九年に千歳川放水計画の中止が決まりましたが、この長い経過のなかから、わたしたち道民は何を学ぶことができるのでしょうか。小野 この計画は、千歳川流域の洪水を防止する上ではある程度の効果があるけれど、反対に若小牧や早来など洪水とは無関係だった地域に洪水時の濁流を持ち込み、大谷峠沿岸の漁業に致命的な打撃を与えます。また、ラムサール条約指定地のウトナイ湖と、美々川の自然環境が大きく損なわれます。にもかかわらず地元住民や漁業関係者に知らされないまま、北海道開発局のなかで秘密裡に計画が策定され、河川審議会（建設大臣の諮問機関）で一方的に決定されてしまいました。つまり、計画自体が非常に無理なものでした。それに対して、漁民や自然保護団体はもちろん、「無駄な公共事業だ」といって市民



松倉ダム計画の中止後、総合治水対策をめざして検討会で議論がつづく(2000年5月、函館市内で)

「を作れ。我々は、そのなかから選ぶよ」ということにはしないとダメです。いろいろな議論がありました。現場でも少し議論したならば、違った展開になったのではないかと、とも思っています。

小野 それができれば、一番良かったけれど、向こうはそれは乗らないですね。特に遊水地は地権が絡むので、開発局も地元も警戒する。「俺のところは勝手に遊水地にされたら困る」とかね。僕らも、勝手に人の土地を遊水地とは言いえないから、地図上では提案するけれど、ちょっと厄介なところはありました。長沼町の一部ですが、千歳川とは関係ない窪みだところが一番被害、遭って、水に浸かってしまおうという事実がありました。現場に行ってみれば放水路をいくら造ってみてもダメだと分かるわけで、そういうのは是非やりたかった。ただ、検討委員会(知事の諮問機関)の段階で初めて委員の皆さんに行ってもうたことはありますけどね。

——流域自治体とは「すべて開発局にお願います」という姿勢がありますが。

小野 もう、そういう時代は終わりました。あくまでも「自分たちがとるんだ」と考えて、自治体なりに調査してほしいけれど、国からの交付金に依存して開発局と衝突がないという悪しき伝統もあります。国土交通省になっても河川は開発局だから、どこまで自治体が独自の案を出せるかです。それはいいもなおさず「市民がどこまで頑張るか」につながる。「行政の責任」と言うけれど、最後は市民の責任になってきます。

——洪水被害の実態から物事を考えるところから出発していないのが、一番の問題じゃないですか。

小野 彼らは架空のものから考えているので、「実績から考えよう」と言っています。行政側も実績を基に数字を出して、史上最大洪水を基本に治水対策をやればいいのであって、それ以上のあまり高い治水施設は際限もないし、財源がないのだから止めよう、ということですね。

——市民も被害者などをあまり知らない。体験した人は分かるかもしれませんが。

小野 洪水を体験した人ほど「過去最大の洪水を防いでくれ」としか言っていない。行政側は勝手に数字をうんと吊り上げて、そこで住民とずれてしまっている。そして「放水路やダムができないと、またあの洪水がくるよ」というような言い方をします。ところが、そうじゃない。あくまでも過去の最大洪水を議論の基準にして、「防げるかどうか」で議論するほうが正しい。

——平取ダムの問題でも、確かに日高は道内でも雨は多いんですが、基本高水流量がものすごく高く設定されている。

小野 すべてそうなんです。——行政に対して市民は何を言っていけばいいんでしょうか。

小野 史上最大の洪水がダムで防げるのか、そのうえで、どれくらい流量を嵩上げしているのかはつきりさせる。市民も、もう少し勉強しなければいけません。

——当別ダムの目的には、洪水調節もありますが、水道用水のウエイトが高いですね。

——「時のアセスメント」で函館の松倉ダム計画が中止になりました。何故が取材したんですが、道は再評価の過程で意見交換や説明会をやり、きこちなかつたけれど担当者も情報を提供して一生懸命やっていた。そのあたり、どう思いますか。

小野 道が「時のアセス」の対象にしたことは大ヒットです。松倉ダムも本当に必要な理由がなかったわけで、本当に必要なダムならば行政マンは頑張ると思う。でも、「ダムはいらないのか」と突き詰めた、いらないわけですね。だから「時のアセス」もできた。

——行政マンとしても、本当に造ろうとしたダムではなかったと。

小野 そう。例えば、僕らは「千歳川放水路はいらん」と思っていたら、行政側が張って頑張るわけで、行政側だって本当に必要だと思えばやるでしょう。松倉ダムも無理があつて、人口がどんどん減っているのに水需要が伸びるといふ数値を平気で出しているわけで、あまりにお粗末です。それと同じようなことが、サンルダム(下川町)や平取ダムなどでもやられている。

——松倉ダムでも中止後、市民の代表と専門家によって二つの検討会をつくり、「川だけでなく、面的に総合治水をやる」という合意の下で議論を

実績洪水をもとに ダム計画の検証を

——道「時のアセスメント」で函館の松倉ダム計画が中止になりました。何故が取材したんですが、道は再評価の過程で意見交換や説明会をやり、きこちなかつたけれど担当者も情報を提供して一生懸命やっていた。そのあたり、どう思いますか。

小野 道が「時のアセス」の対象にしたことは大ヒットです。松倉ダムも本当に必要な理由がなかったわけで、本当に必要なダムならば行政マンは頑張ると思う。でも、「ダムはいらないのか」と突き詰めた、いらないわけですね。だから「時のアセス」もできた。

——行政マンとしても、本当に造ろうとしたダムではなかったと。

小野 そう。例えば、僕らは「千歳川放水路はいらん」と思っていたら、行政側が張って頑張るわけで、行政側だって本当に必要だと思えばやるでしょう。松倉ダムも無理があつて、人口がどんどん減っているのに水需要が伸びるといふ数値を平気で出しているわけで、あまりにお粗末です。それと同じようなことが、サンルダム(下川町)や平取ダムなどでもやられている。

——松倉ダムでも中止後、市民の代表と専門家によって二つの検討会をつくり、「川だけでなく、面的に総合治水をやる」という合意の下で議論を

小野 札幌市との水のやり取りができていれば、石狩市は別ダムからの供給はいらんないし、将来自ら水需要が伸びると思えません。節水も省エネのほうを考えないで右肩上がりの想定ばかりで、そんなことをしたら、また千歳川にダムを造らなければならぬ。松倉ダムもその矛盾を突いたのは良かったと思います。

改修の発想転換し
川の周囲に遊水地

——天塩川水系パンケナイ川(中川町)のコンクリート三面張りになっていた区間で、開発局に要請して河床部かのコンクリートをはがしてもらった、という話を著書のなかで紹介されていますが、どう評価しますか。

小野 評価していますが、僕らが乏しい研究費で調査しているだけで、アフターケアが全然なされていません。本来は開発局がやるべきことで、あまりに無責任です。

——河堤改修はいろんな試みをしてますが、まわりの高水敷(注3)は相変わらずです。「開発局の限界なのかな」と思うのですが。

小野 高水敷のコンクリート護岸に何が所か穴を開けて木を生やせばいいわけで、そうすれば川の自然は元に戻っていく。「木が生えたと川の断面積が減るから」と、彼らはやるうとしますが、まわりを遊水地にすればいいわけで、河川敷は直営公園なんですから一年に一回くらい水に浸かっても構わないわけですよ。

——護岸にしても「近自然型工法を試みる

進めている。こうした新しい試みを生み出したことで、今後の河川公共事業のあり方に一石を投じたように思います。

小野 行政の人が出てきて直接市民と対話したのは、おそらく初めてでしょう。そうしたことでは、おそろしく良かった。そういう意味では良かった。——松倉ダムは小規模で、「時のアセス」もあつて中止しやすく、護岸も中止に至る過程を一つのモデルにしたかった。その一方で、道内ではたくさんダム計画が進んでいます

が、例えば札幌圏の人たちは夕張のシューパロダムにはあまり関心がない。あのダムは、貯水庫が日本で十本の指に入るうえに、今あ

とが出来ないのかな」と思ってしまう。

小野 あれが限界で、低水路だけでは無理なんです。堤防から堤防の間をもう少し変えたり、いざというときは川をあふれさせたり、いざというときは北海道は遊水地になり得る場所がいっぱいあるわけだから、年に一回だけあふれたって補償すればいいわけです。工事をお金よりも安いね。もう少しそちらへ進まない、小手先でいじくり回しても、あれが限界だと思えます。

——AGS事業(注4)の事例集を見ると、木で護岸を造ってみたいと思っています。

小野 まずいのは、川の個性がなくなっていることです。どこでもAGSと分かっていうなり方では、むしろ川の個性を殺していることになる。どうしても改修せざるを得ない場所であるのはいかにもしれないけど、今はパターン化してしまつて、かえってます。発想を変え、川は自然にしておいて、まわりを買い取ったり、遊水地を造るなりして、あふれてもいいように変えていくほうがいい。そういう大胆な試みをAGSのなかに入れるべきです。

——護岸を階段にしたりしていますよね。小野 それももうやめてほしい。

小野 コンクリートに穴を開ければいいという発想ですが、まわりの木を伐つてしまつと、果は確保できても、カワセミが留まる場所がなくなればどうしようもない。「カワセミが羽根のためには、どれだけの自然がまわりだけを確認した」という短絡的な発想ですよ。

流域自治体は独自の 調査とプランで

——これまでの経緯を教訓に、自治体はどうすれば良いと思いますか。

小野 「開発局は治水対策のプロ」なんだから、基本高水流量を変えて何通りかのメニュー

も、きめ細かな想定はなかったと。

小野 なかつたというより、千歳川放水路では現実には隠していたんです。あれ(基本高水流量)の試算値をオープンにするのに三年もかかったんですからね。

くしたかつたんでしょね。

——事業を大きくするための手法はあつても、きめ細かな想定はなかったと。

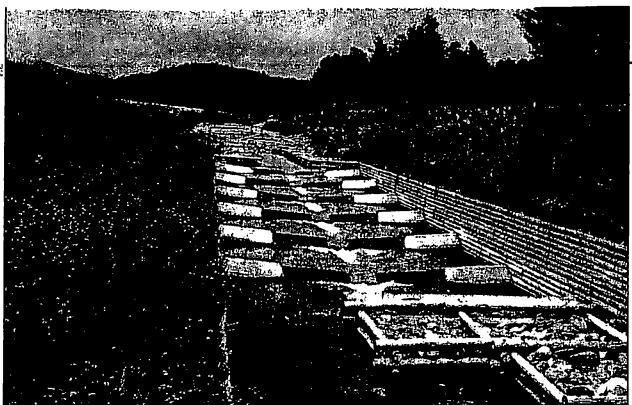
小野 なかつたというより、千歳川放水路では現実には隠していたんです。あれ(基本高水流量)の試算値をオープンにするのに三年もかかったんですからね。

くしたかつたんでしょね。

——事業を大きくするための手法はあつても、きめ細かな想定はなかったと。

小野 なかつたというより、千歳川放水路では現実には隠していたんです。あれ(基本高水流量)の試算値をオープンにするのに三年もかかったんですからね。

くしたかつたんでしょね。



▶天塩川水系パンケナイ川でのAGS事業



沙流川水系では二風谷ダム(写真)の上流に平取ダムの計画が取り沙汰されている

